

翼を忘れた小鳥たち

登場人物

丸川 皐月（18）	女子高生、丸川家末娘
熊田 景子（18）	皐月の親友、女子高生
筒井 将太（20）	大学生、レコードショップのアルバイト店員
丸川 志保（52）	皐月の母、専業主婦
丸川 雄一郎（56）	皐月の父、土木建築業
丸川 康作（32）	皐月の兄、丸川家長男
丸川 弘子（26）	康作の妻
丸川 健介（23）	皐月の兄、丸川家次男
丸川 百合子（20）	皐月の姉、丸川家長女

あらすじ

一九七〇～一九七二年、京都府。

京都の田舎町に暮らす丸川皐月（18）は自転車です30分程かけて私立高校に通っている。幼い頃から歌う事が好きで、高校卒業を間近に、一大ブームとなっていたグループサウンズやフォークソングに興味を持ち、都会の文化に憧れを抱いていた。しかし、高校卒業後すぐに結婚が決まっております、鬱屈とした気持ちを抱えたまま日々を過ごしている。

皐月の同じ高校の親友、熊田景子（18）は、家も近所で通学を共にし、皐月にとって一番の信頼できる相手であり、心の拠り所となる存在。頭が良く物知りの景子は、卒業したらずぐに上京すると皐月にいつも話していた。

景子に触発され、地元を出たいと考えるようになった皐月だが、周囲にその思いを告げる事は出来ずにいる。

卒業式を間近に控えたある日、景子は何の連絡もなく、突然高校を中退してしまふ。皐月は景子の家に連絡するが、既に景子は同じ地域の家に嫁いで実家を出ていた。

嫁ぎ先を訪ねる皐月だが、景子には会わせてもらえない。心の拠り所であり、希望の光であった景子の存在を失った皐月は失望と混乱の中、一つの決断を下す。

○舞台装置

舞台奥に堤防があり、手前に向かって滑り台の様な傾斜。

堤防の上に自転車が上手向きに二つ並んでいる。

舞台手前を上下に分け、下手側は丸川家の居間、上手側はレコードショップから始まる。

①堤防（朝） 【一九七〇年 十月】

セーラー服姿の丸川皐月（18）、熊田景子（18）、自転車を漕いでいる。

皐月「え!! 今日物理あったっけ!!」

景子「昨日相田先生変更言うてたやん」

皐月「私その時居いひんかった! 景子教えてよ!」

景子「皐月もいたよ! ホームルームの時やで!」

皐月「うそーん!」

景子「しかも今日小テストやで!」

皐月「ほんまに!! 終わった、何も勉強してへん」

景子「そんな難しくないよ。基礎問題しか出えへんって」

皐月「基礎やろうが応用やろうが関係ないわ! もう卒業無理かもしれん!」

景子「何言うてんの! 定期テストで落第点取らんかったら大丈夫や!」

皐月「取るねん! 私は簡単に落第点とってまう自信がある!」

景子「そうこう言うても今まで一回も取ってへんやん!」

皐月「景子がおるからや! 景子がおらんようになったら終わり! ジ・エンド!」

景子「（笑って）なんで理系選択したんよ。皐月どう考えても文系やん」

皐月「しやあないやん! 景子が理系や言うんやから!」

景子「いや、私関係ないやろ」

皐月「あるわ！ 景子おらんかったら私の青春灰色や！」

景子「やめや！ 気色悪いな！」

皐月「学校着いたらすぐ範囲教えてな！」

景子「もし小テスト8割取れたらレコード1枚買うたるわ！」

皐月「え!! ほんまに!! めちやめちや羽振りええやん！」

景子「最近お母ちゃん私に甘いねん」

皐月「なんで？」

景子「もうすぐ嫁に行つてまう思てるからやろ。毎晩写真やら見返してはしんみりしてはるわ」

皐月「ああ……」

景子「せやから頑張りや！」

皐月「何を？」

景子「小テストやん！」

皐月「あ、せや！ 忘れてた！ もうあかん！」

自転車を降り、堤防を滑り下りる皐月と景子。

照明切り替わり、夕方。

②レコードショップ（夕）

筒井将太（20）、レコードショップの奥から登場し、レジに座る。

堤防を滑り降りた皐月と景子、じゃれ合うようにしながらレコードショップに入店。

筒井「いらつしやい——あ、君らか」

皐月・景子「こんにちは」

筒井「こんにちは。学校帰り？」

皐月「はい！」

景子「今日小テストがあったんです」

筒井「そうなん、お疲れ様」

景子「それでこの子が8割取れたらレコード1枚プレゼントするって約束してて」

筒井「ほな取れたんや、おめでとう」

皐月「いや……」

筒井「ん？」

景子「プレゼントは無いです！」

筒井「なんや、残念やったね」

皐月「はい。なんで、今日は見るだけで……すみません」

筒井「かまへんよ。何か気になってるレコードあったらかけたげるで」

皐月「ほんまですか！」

景子「良かったな」

筒井「何聞きたい？」

筒井、皐月と景子に椅子を勧める。

皐月「えつと……なんかフォークソング……」

筒井「皐月ちゃんフォーク好きやな」

皐月「はい」

筒井、レコード盤を探しながら、

井「えー、何がええかな……」

景子「皐月、あれは？」

皐月「ん？」

景子「なんかほら、あれ！今年の夏出た曲やん」

皐月「何、そんなんいっぱいありすぎるわ」

筒井「今年の夏？」

景子「ほら、昨日帰り自転車こぎながら歌ったやん！」
皐月「ちよっと！」

筒井「（笑って）歌ってたん？」

皐月「歌ってません！　自転車こぎながら歌うなんかおかしいやん」

景子「歌ってたって！」

皐月「歌わん！」

景子「歌ってた！」

筒井「僕も歌うで」

皐月・景子「え？」

筒井「自転車こいでたら気分ええからついつい歌いたなるん分かるわ」

皐月「……そうですね」

筒井「何歌ってたん？」

皐月「……題名分からへん」

筒井「ちよっと歌ってみて」

皐月「え、いやそれは……」

景子「ええやん、ちよっと歌うくらい！　いつもでかい声響かせて歌ってるやん！」

皐月「あんたほんましばらくで！」

筒井「ハミングでもええよ」

皐月「……（歌）この広い野原いっぱい咲く花を」

筒井「（笑う）」

皐月「何で笑うんですか！　ひどい！」

筒井「ごめんごめん、ちゃうねん、それが題名や」

皐月「え!!」

筒井、レコード盤を棚から取って差し出す。

筒井「この広い野原いっぱい、これやろ」

皐月「あ、はい」

景子「良かったやん、分かってもらえて。これ聞かしてもらえますか？」

筒井「ええで。今日店長休みやから聞きたい放題や」

景子「やったー！ ラッキー！」

筒井「景子ちゃん喜び方がハイカラやな。皐月ちゃん、

一緒に歌ってもええで」

皐月「歌いませんよ！」

筒井、レコードをかける。

『この広い野原いっぱい』が流れる。

筒井、レジ裏からフォークギターを取り出し、レコードに合わせて弾き始める。

皐月「え、ギター！」

景子「すごい！ 弾けるんですか!!」

筒井「最近始めたばかりや」

皐月「でも今弾いてるじゃないですか！」

筒井「僕もこの曲好きでな、弾けるようになりたくて楽譜買ってた。せやから弾けんのまだこの曲だけや」

皐月「へえ、すごい」

筒井「なんもすごいよ。練習したら誰でも弾けるようになるわ」

皐月「ほんまですか？」

筒井「なるよ。皐月ちゃんやったら歌上手いから弾き語りしたらええねん」

皐月「弾き語り……」

景子「なんかかっこええな！」

筒井「その堤防なんかでやったら通りかかる人聞いってくれるで」

景子「私知ってる！ 都会では路上でギター弾きながら音楽やってる若い人がいっぱい居てるて！」

皐月「そうなん？」

筒井「景子ちゃんよう知ってるな」

皐月「なんで路上で？」

筒井「皆に聞いてもらいやすいからや！聞いてくれてええな思ってくれた人がよおけ居たら歌手になれるかもしれない」

皐月「歌手？！　こんな、レコード出すみたいな？」

筒井「そうやで。まあ、こんなとこでやっても聞いてくれんのはその辺に住んでるおっちゃんくらいやけどな」

皐月「路上で歌うだけで？」

筒井「いや、そらそんな簡単とちゃうで。せやけどもしかしたらそういうラッキーもあるかもしれない言う事や」

皐月「ラッキー……」

筒井「幸運は待ってても勝手には舞い込んできていひん。せやけど自分が動いたら風が起きる、風が起きたら桜の花びらが舞うみたいに、ふと思ってもよらん幸運が目の前に舞い降りて来るかもしれないやろ」

皐月「ああ……」

筒井「ま、それを掴めるかどうか自分次第やけどね」

皐月「……それ、どこでやったらいいんですか？」

筒井「どこ？　それはまあ、人がいっぱいおるとこやろな」

景子「関西やったらそら、大阪やろ！」

筒井「おお、そうやな！　万博先月で終わってしもたけど」

皐月「大阪……」

景子「皐月、歌に行ったらええやん！」

皐月「え!!」

筒井「なんや、皐月ちゃん歌やりたいん？」

皐月「いや、そんな訳じゃ……ただ好きで……」

景子「嘘やん！　歌手になりたいんやろ？」

皐月「そんなんちゃうって。無理やし」

筒井「無理かどうかはやってみな分からんで」

皐月「ギターも弾かれへんから弾き語り出来ひんし」

筒井「僕もついて行ったらるか？」

皐月「え!!」

筒井「僕が弾いて、皐月ちゃんが歌ったらええやん」

皐月「え:::」

景子「いや、筒井さんまだ1曲しか弾かれへんのでしょ？」

筒井「ばれたか。皐月ちゃんが自分で弾けるようになった

た方が早いかな」

景子「皐月、ギターやりや！ギター弾けるようになって、

都会へ行って、歌手なって！」

筒井「ギター練習するんやったら貸すで」

景子「ええやん！」

皐月「ちよっと待って！待ってください。無理です、

ほんまに。歌は好きやけど、ギターも興味あるけど、

でも:::ほんま、無理です。ごめんなさい」

間。

筒井「そうやな、ごめんごめん。さっきの皐月ちゃんの

声があええ声やったからつい勝手に盛り上がってしまった

わ。堪忍してな」

筒井、ギターを置いてレコードを止める。

筒井「二人とも他に何か聞きたいのある？グループサウンズもあるで」

照明切り替わり、夜。

皐月と景子、筒井に一礼して退店。

筒井、出て行く二人に手を振り、店の中でギターの練習を始める。
皐月と景子、堤防を駆け上がり、自転車の向きを反対にしてから跨り、漕ぐ。

③ 丸川家（夜）

堤防で自転車を漕いでいる皐月と景子を月明りがぼんやり照らす。

舞台手前下手では丸川志保（⁵²）とおんぶ紐をつけた丸川弘子（²⁶）が家族の夕食をちゃぶ台に並べている。

部屋の奥から土木作業着姿の丸川雄一郎（⁵⁶）、丸川康作（³²）がばらばらと出て来る。
全員が着席し食べ始める。

雄一郎「……皐月は」

志保「もう帰って来るでしょ」

雄一郎「最近帰り遅いこと増えてるんちゃうか」

志保「注意しときます」

康作「まあええやろ。あと半年もせんうちに、卒業した

ら友達と離れ離れや。今のうち遊んどきたいんやろ」

雄一郎「遊ぶ言うて何すんねん」

弘子「色々あるんちゃいますか？ 皐月ちゃん私立行っ

てはるし、派手な遊び方する子もいるでしょ」

志保「うちはそんな小遣い持たせてへんさかい」

雄一郎「お前が私立なんか入れるからや。兄弟全員公立

やったのにお前は皐月にだけ甘すぎる」

志保「……お味噌汁もつとありますよ」

皐月、景子、自転車を降りて手を振り別れる。

景子は堤防の上を下手袖へ、皐月は堤防の手前を滑り下りて丸川家へ。

レコードショップ内の筒井、ギターを片付けて店の奥へ消える。

皐月「ただいま！」

弘子「ん！ 皐月ちゃんおかえり！」

康作「おかえり」

志保「どこ行ってたん」

皐月「景子とちよつと」

弘子、立ち上がって皐月の食事の支度をする。

皐月「あ、弘子さんいいですよ、自分で」

弘子「ええよええよ、座って」

雄一郎「自分でやりなさい」

皐月、弘子、一瞬固まって雄一郎を見る。

皐月「弘子さんありがとう。やります」

弘子「そう……うん」

弘子、自席に座る。

雄一郎「……嫁入り前の娘がこんな時間まで遊び歩いて」

皐月「ごめんなさい」

康作「まあまあ、向こうの長屋の方の奴らなんかもつと不良ばかりやで。皐月なんかまだ晩飯の時間に帰って来てんねんから別にかまへんやろ」

雄一郎「かまへん事ない！」

志保「臯月、何してたんか言いよし」

臯月「：：景子とレコード聞きに行つてただけや」

雄一郎「またレコードか。そんなもんいくらあったかて

嫁ぎ先で聞かれへんで」

臯月「なんでよ」

弘子「臯月ちゃんほんま音楽好きやね」

臯月「うん、まあ：：」

弘子「声も綺麗やしね、羨ましいわ」

康作「弘子」

弘子「何よ」

臯月「弘子さんありがとう」

一同、沈黙の中食事を摂る。

康作「：：：そうや、百合子そろそろ臨月やろ。予定日いつ？」

志保「来月の1週目くらいちゃうか」

康作「こっち帰つて来るん？」

志保「知らん、どないするつもりなんやろな」

康作「まあ近いからな。帰ろ思たらすぐ帰れるし」

雄一郎「せやけど帰るんやったら部屋も片付けなあかん

やろ。早めに聞いとかなあかんで」

志保「はい」

弘子「性別どっちやろなあ」

康作「第一子は男がええな」

弘子「なんで、一姫二太郎言うやん」

康作「そらそうやけど、そら一番上は男がええやろ。な

あ？」

臯月「――私？ 知らん、別にどっちでもええわ」

康作「なんや冷たいなお前」

志保「健康で生まれてくれたらそれでええ」

康作「まあな」

雄一郎「皐月、来週一週間学校休め」

皐月「え？　なんで？」

雄一郎「準備や」

皐月「何の？」

雄一郎「嫁入りに決まっとるやろ」

皐月「え？　いや、早いやろ。卒業までまだ半年くらい

あるんやから」

雄一郎「もうお前、早めに学校辞め」

皐月「は!!　何言ってるん？」

雄一郎「最近学校終わってからもすぐ帰らん、フラフラ

して悪い連中とつるんでるやろ」

皐月「つるんでへんわ！　景子や言うてるやん！」

雄一郎「そんなもん分からへんやろ」

皐月「いや、分かるわ！　景子やん！　そんなんやった

ら景子に聞いて！」

康作「お父ちゃん、何で急にそんな事言うたんの」

弘子「せめて卒業はさせてあげはったら……せっかく3

年間頑張って来たんやから」

皐月「お父ちゃんお願い、卒業させて！」

雄一郎「なんで卒業がそんな大事や。大学やら行くわけ

でもないのに」

皐月「それは……でも卒業したい！　中退なんかしたら、

今まで勉強してきたことが無い事になってしまいうや

ん！」

雄一郎「無い事になんかならん。勉強した事は頭に入っ

てるんやから」

康作「中退なんかさせたら皐月が他の不良と同じや思わ

れるで」

雄一郎「そんなことあらへん」

皐月「なんでそんな事言うん!! 私及早よ帰らんから?
それともさっさと結婚させて私をこの家から追い出し
たいん!!」
雄一郎「……」
志保「お父ちゃん、どうしはったん?」
雄一郎「……」
皐月「お願いします! 卒業させてください! 明日か
ら毎日、寄り道せんと6時には帰ります! お願いし
ます!」

皐月、床に手をついて頭を下げる。

雄一郎「……5時や」

皐月「え?」

雄一郎「5時までに帰れ」

皐月「5時って……それはちよつと」

雄一郎「5時言うたら5時や!」

皐月「……はい」

皐月、退室。

雄一郎、康作も順番に食事を終え、ばらばらと退
室。

志保と弘子、食器の片付けをして退室。

④ 堤防（夜）

ぼんやりと薄暗い月明り。
上部から吊るされた無数のLED電球が星の様に
細かく光っている。

堤防の上、下手から景子が顔を出す。

景子、口笛を3回吹き、堤防の下手側斜面に座る。

しばらくして皐月、丸川家の裏から靴を持って登場。

景子、立ち上がり手招き。

皐月、景子を見つけて急いで靴を履いて駆け寄る。

景子「大丈夫やった？」

皐月「うん」

皐月と景子、堤防の斜面に座る。

皐月「景子は？」

景子「ジョンに吠えられたわ」

皐月「え！ 気付かれた？」

景子「ううん、ジョン通行人全員に吠えるから家族皆慣れてんねん」

皐月「良かった」

景子「晴れて良かったな」

皐月「ほんまに」

景子、腕時計を見て、

景子「そろそろ流れ始めるで」

皐月「え、腕時計？ 自分の？」

景子「お父ちゃんの。こつそり拝借してきたわ」

皐月「ばれへんの？」

景子「大丈夫、普段もう一つの、金属ベルトの方便こたはるから」

皐月「そっか」

レコードショップ奥より筒井、ギターを手に登場。
筒井、上手の堤防の斜面に腰掛け、ギターの練習

を始める。

筒井のギターの音がかすかに響いている。

景子「皐月、どれがどの星座分かる？」

皐月「いや、オリオン座と北斗七星しか分からん」

景子「なんや、そうなん？ あそこ、あの細かい星がいっぱい並んでるとこあるやろ？」

皐月「ん？ どれ？」

景子「あの、一番光ってるやつのかっち側の」

皐月「え？」

景子「あれやん、この指の先ずーっと延長して」

皐月「えー…あれか？」

景子「たぶんそれ。そののこっち側の、あの細かい星あるやろ」

皐月「いや、それがよう分からんねん。細かい星ありすぎる」

景子「なんでよ、あそこからこういう風に点々点々って並んでるのがあるやん？」

皐月「…うん」

景子「分かった？」

皐月「うん」

景子「そこから、こういう感じで曲がって繋げられる星があるやろ」

皐月「うん、ある」

景子「それがアンドロメダ」

皐月「それがアンドロメダ」

景子「分かった？」

皐月「うん、分かった」

景子「…絶対分かってへんな」

皐月「分かってない」

景子「なんでやねん、分かるやろ普通に」

皐月「分からんわ！　なんで星と星を無理やり線にする必要があんねん！　そんな人間のエゴやろ！　第一アンドロメダって何？　何語やねん！」

景子「アンドロメダは人の名前や」

皐月「あ、そうなん？　え、人？　偉い人がお札になるみたいな感じで昔の偉い人は星座になったって事？」

景子「いや、偉い人言うか、ギリシャ神話に出て来る架空の人や」

皐月「なんや、架空か。神様って事？」

景子「たぶん神様なんかな？　神様の子供？」

皐月「神様の子供は神様やろ」

景子「でも政治家の子供が政治家とは限らんで」

皐月「え、神様ってそういう感じなん？　職業なん？」

景子「職業やろ。星とか動物とか色々作ってはるやん」

皐月「私、日本人の子供は日本人みたいな感じかと思ってたわ」

景子「え？」

皐月「だから、犬の子供は犬、みたいな。神様の子供は神様みたいな！」

景子「あゝゝあゝ、そうなんか。そうかもしれんな」

皐月「いや、知らんで。景子なんでも知ってるやん」

景子「さすがに神様の個人的な事情についてまでは知らんわ」

皐月「なんや、大したことないな！」

景子「アンドロメダが何かも知らんくせに」

皐月「でもそう言われて見たら余計に人の形に見える星座なんか見当たらんわ」

景子「せやな。私もあれがアンドロメダ座やって分かるだけで、人の形には見えへんわ」

皐月「やろ？　昔の人はどうやって星座を決めたんやろな」

景子「……でも、私も思うで」

皐月「何？」

景子「星は繋げるべきじゃないんちゃうかって」

皐月「え？ いや、私何もそこまで言うてへんけど」

景子「え!! 言うたやん! 人間のエゴやって」

皐月「ああ。いや、ごめん。あれただの負け惜しみや」

景子「負け惜しみかいな!」

皐月「うん、紛れもない」

景子、黙って空を見ている。

皐月「え、何で？」

景子「何？」

皐月「なんで星は繋げるべきじゃないん？」

景子「ああ……いや、何て言うか……繋げてしまったら、

もうそれにしか見えへんやろ」

皐月「え？」

景子「星一個一個が横に並んでるわけとちゃうし、寿命

も年齢も出来た理由も全部バラバラなのに、たまたま

都合よく並んでるように見える星をここから見て、何

座何座って名前付けてさ、そういうの何か違うんちゃ

うかなって思う」

皐月「……どうやったらええの？」

景子「どう？ うーん……ただ無数の星の波に飲まれた

い」

皐月「星の波？」

景子「うん。こうやって、数えきれへん星見てたら、だ

んだん波になつてこっちに押し寄せてくるような、そ

の波にどんどん飲み込まれて行くような気がせん？」

皐月「……それはちよつと怖いんやけど」

景子「(笑って)そっか。でもなんか、そんな気がするん

よ。それで、星一個一個の事考えたい。すごく大きく

見える星も、ただ近いだけで、そんなに大きいわけじ

やないかもしれん。小さく見える星は、ものすごく古い星で、もうすぐ寿命を全うしようとしてるのかもしれない。：：そういう事を考えて、想像したい。一個一個の歴史の事を想像したい」

皐月「：：」

景子「星座って一つの塊として考えてしまったら、なんか急に人工的な物に見えて来てしまうんよ。そら、昔は星が目印やったからな、そうやって名前付けて方角とか時間とか読んだからしやあないんやけど」

皐月「景子：：」

景子「え？」

皐月「やっぱりあんた最高やな」

景子「え、何、やめてよ」

皐月「最高やわ。ロマンチストな天才ってなかなかおらんで」

景子「馬鹿にしてるやろ」

皐月「してへん！ほんまに最高と思ってる！」

景子「当たり前やろ。私は最高や」

皐月「あ！」

景子「え!!」

皐月「今、流れへんかった!!」

景子「うそ!! 皐月がいらんこと言うから見逃したやん！」

皐月「あ！また流れた！」

景子「え!! どこ!!」

皐月「あつち！」

景子「私も見たい見たい！」

皐月と景子、星空に目を凝らす。

景子「あ！」

皐月「見れた!!」

景子「うん！」

皐月「あ！」

景子「あ！」

皐月「すごい、いっぱい流れ出した！」

景子「すごいな！　綺麗！」

皐月、笑う。

景子「何？」

皐月「いや、えらい普通な感想やなと思って」

景子「え？　何よ、普通でええやん」

皐月「さつきすごい哲学的な事言うてた割には」

景子「こういう時は素直に綺麗でいいの！」

皐月「せや！　願い事せなあかん！」

景子「え、そんなんするん？」

皐月「チャンスやん！」

景子「チャンスか？」

皐月「ほら、3回やで」

景子「3回は無理やろ」

皐月「ええから一応しとくねん、こういう時は！」

景子「もつとゆったり楽しみたいんやけど」

皐月、空を凝視し、流れ星を発見して、

皐月「賢くなりたいたい賢くなりたいたい賢くなりたいたい」

景子「え？」

皐月「消えるまでに言えたかな!!」

景子「賢くなりたいたいん？」

皐月「うん」

景子「なんで？　歌手になりたいとかかと思ったのに」

皐月「別に歌手になりたくない」

景子「なんで賢なりたいたいん？」

皐月「景子賢いから色々知ってるやん。私もそうなりたい。色々知ってたら、困った時とかやりたい事ある時に人に頼らんでも自分で何とか出来るやん」

景子「別に私賢ないし、物知りでもないよ」

皐月「そんなことない！私の知り合いの中で一番賢いよ！」

景子「なんでそんな褒めるん。気持ち悪いな」

皐月「褒めてへんよ」

景子「え？」

皐月「事実を言うてるだけやし。勘違いせんといて！」

景子「腹立つ！」

皐月「景子も早よ願い事せんと終わってしまうで！」

景子「え、私はええわ、別に星に叶えてもらわんでも自分で叶えるし！」

皐月「わ！さすが秀才は言う事が違うな！」

景子「秀才やら天才やら言うのやめて」

皐月「じゃあ私に願って」

景子「え？」

皐月「星より私に願い事言うた方が叶うかもしれんで」

景子「なんでよ」

皐月「友達やから協力できる。星は流れてどうせ燃えて消えてしまうからその後の事は保証してくれへんやろ」

景子「自分さっき3回願い事してたやん」

皐月「それはそれ、これはこれや」

景子「何よそれ」

皐月「ええから、ほら！聞かせて」

景子「別に協力してもらおう事ないから」

皐月「何よ冷たいなあ」

皐月、諦めて星を見る。
景子、しばらく黙って星を見る。

景子「……私上京する」

皐月「え!!」

景子「ずっと考えててん」

皐月「え、え、待って……え!!」

景子「何回『え!!』言うねん」

皐月「上京って、東京!!」

景子「平安時代終わってからは京都行く事は上京言わんからな」

皐月「いつ!!」

景子「卒業式終わったら、家帰らんとその足で」

皐月「え……それってどういう事? お父ちゃんやお母ちゃんは?」

景子「言う訳ないやん。言うたら監禁される」

皐月「でもじゃあ……もう会われへんの?」

景子「……」

皐月「そうなんや……全然知らなかった」

景子「ごめんな」

皐月「……何で?」

景子「何でって」

皐月「東京……やなくてもええやん。大阪でも」

景子「そんな近いとこあかん。すぐ連れて帰られるわ」

皐月「……そうか」

景子「でも、何となく感じてたやろ」

皐月「いや、感じてた言うか……まあ出たいんやろなとは……ほんまはまだ結婚とかするより大学とか行ったりしたいんやろなとは……」

景子「そう。まだ結婚なんかしたない。でも結婚したないだけちゃう。もうここに居たないねん」

皐月「……じゃあ、誰にも言わんと行くの?」

景子「うん」

皐月「行つてどうすんの？　お金とか」

景子「親のお金くすねて行く」

皐月「そんなんではすぐ生活困るやろ」

景子「なんとかする。働く。女でも働けるとこ、東京にはいっぱいあるらしいから」

皐月「……」

景子「そんな顔せんといて！　友達やから願い事叶える手助けしてくれるんちゃうの？」

皐月「……うん」

景子「……私、東京行つて働いて、お金貯める。それから勉強して自立する。それで、ここから出られへん、この田舎で自分らには何も出来ひん思つてゐる人らに、ほんまは行こうと思えばどこでも行けるしやろうと思えば何でも出来るって事を伝えたい。私を見て、そう思つて欲しい。そういう存在になりたいねん」

皐月「……分かった」

景子「分かつてくれる思つた」

皐月「私ら皆の希望の光になつて」

景子「任せて」

皐月「それで、私の事迎えに来て」

景子「……それは無理や」

皐月「何で!!」

景子「もう二度とここには戻られへん。一回出たら帰つて来るつもりはない」

皐月「そんな……ほんならほんまに今生の別れて事？」

景子「なんでよ！　皐月も東京来たらええやん！」

皐月「え!!　どうやつて」

景子「国鉄乗つて」

皐月「そんな無理や！　私には無理！」

景子「そうやろ、そう思うやろ。皆そう思つてんねん。でもそれを、その意識を変えたいんよ。無理な事ない。

絶対、絶対、無理な事ないねん！」

皐月「……私、お母ちゃんの傍離れられへん」

景子「……行きたないんやったらええねんで。ここに居

たいんやったら」

皐月「ここに居たい訳やないけど」

景子「行きたいって思うんやったら、絶対行ける。でも

行きたないねやったら行かれへん。単純な事やで」

皐月「……私に行かれへん」

景子「そっか。それはそれでいいと思うよ」

皐月と景子、しばし星を眺める。

皐月「私、景子の事大好きや」

景子「気色悪い」

皐月「一番の親友思ってる」

景子「やめや」

皐月「会えへんなるの寂しい」

景子「……私も寂しいわ」

皐月「でもそんな事より、景子がここを飛び出す事が嬉

しい」

景子「ほんま？」

皐月「うん！」

景子「ありがとう」

皐月「景子が東京行って、働いたり、勉強したり、学生

運動に交じってデモしたりしてるところ想像するだけで

ワクワクする！」

景子「デモはせんけどな」

皐月「景子がデモしてるとこ、私は近くで見られへんく

ても、そこに景子がいるって思うだけでなんか浮足立

つ！」

景子「うん、デモはせんよ」

皐月「頑張って！ 卒業式のあと、駅まで送る！ 荷物とか隠せる場所も、一緒に探そう！」

景子「……ありがとう」

皐月、景子をひしと抱きしめる。

景子、応えて皐月を抱きしめる。

皐月「私だけの秘密な！」

景子「ありがとう！」

皐月「絶対、絶対、成功させよな！」

景子「ありがとう！」

皐月「ありがとう！」

景子「ありがとう！」

皐月、景子、抱き合ったまま泣く。

照明徐々にフェードアウトし、上手でギターを弾く筒井のみを映しだす。

⑤ 丸川家（夕）

上手側、堤防でギターを弾いていた筒井、明転と共にギターを持ってレコードショップの奥に退場。

下手側、大きなお腹の丸川百合子（20）、丸川家の居間で横になって雑誌を読んでいる。

志保、丸川家奥からお茶を持って登場。

志保「百合子、お茶淹れたで」

百合子「……うん」

志保、自分と百合子のお茶をちやぶ台に並べる。

志保「帰って来るんやったらもうちよっと早めに言うて

くれんと、あんた泊まる場所ないで」

百合子「なんでよ、私の部屋あるやろ」

志保「あんたの使ってた部屋今は皐月のや」

百合子「あれ？ 皐月嫁いだんちゃうん」

志保「それは卒業してから」

百合子「まだやっけ？」

志保「今3年生や。来年の春卒業」

百合子「あ、そ。さぞ楽しい学校生活やったんやろな」

志保「楽しそうやったよ」

百合子「そろそうやろ。一人だけ私学入れてもろて」

志保「……あの子は子供の頃から体弱かったさかい」

百合子「皐月なんか、特別勉強できる訳でもないねんか

ら高校やら出んでもええくらいやのに」

志保「あんたかて同じやろ。勉強嫌いやったけど高校出

てるやん」

百合子「学校なんか嫌いやった。ま、皐月が通ってる学

校やったら私かてもうちよっと楽しかったかもしれん

けどな」

志保「あの子かて遊びに行ってたんのちゃうよ。ちゃんと

勉強してあんたよりも成績もええわ」

百合子「あっそ。どうでもええわ」

志保「……ほんであんたどうすんの？ 産むまでここお

んの？」

百合子「そうしよかな思ってたけど、寝るとこないん

やったら一回帰るわ」

志保「ない事ないけど……」

百合子「お腹大きくなかったらどこでも寝るけど、さすが

に今は布団やないと厳しいわ」

志保「臯月帰って来たら部屋空けてもらう様に頼んでみるさかい、夜はそっちで寝て、昼は居間におるか？」

百合子「うん、頼むわ。二月ふたつきほど世話なるわ」

志保「……向こうのお義父さんお義母さんにはちゃんと言うて出て来てるんやろね？」

百合子「当たり前やん。そんな家出見たいな真似せんわ。こんな近くの実家に」

志保「それやったらええけど、あんた家出癖あったやろ」

百合子「何よ癖って。別に癖で家出してたんちゃうわ」

志保「なんや言うたら手ぶらで家飛び出しては夜までに連れ戻されて……」

百合子「いつの話してんの」

志保「ほんの五、六年ほど前の話やで」

百合子「ああ、いややわ年寄り。時間の流れが私らと違うんやろか」

志保「……お父ちゃんの前でそんな物言いせんときや」

百合子「……」

志保、自分の湯飲みを持って退場。

百合子、雑誌に目を落とし、ぼんやりしている。

百合子、胎動を感じて起き上がり、手でお腹を触る。

しばらくお腹に手を置き、少しなでたりしている。

臯月の声「ただいまー！」

百合子、臯月の声にやや緊張の面持ち。

志保の声「おかえり。あ、臯月」

臯月の声「ん？」

志保の声「自分の部屋行く前に居間行つて」

皐月の声「なんで？」

志保の声「お姉ちゃん来てんねん」

皐月の声「え？……なんで？」

志保の声「もうすぐ生まれるからやん」

皐月の声「里帰り出産ってこと？　そんなん言うてた？」

志保の声「言うてへんけど、そういう事になったから」

皐月の声「えー……そうなん」

志保の声「あんたの部屋な、夜ちよつと百合子に貸した
ってほしいねん」

皐月の声「え!!　何で？」

志保の声「寝るとこないから。身重で居間で寝てとは言
われへんやろ。昔皐月が使ってた部屋は弘子さんにあ
げてしまたし……」

皐月「……分かった」

志保「ごめんな」

皐月「……ええよ、しゃあない。私は居間でかまへんさ
かい」

皐月の足音が近づく。

百合子、雑誌を広げて再び横になる。

皐月、登場。

皐月「……お姉ちゃん」

百合子「おかえり」

皐月「……おかえり」

間。

皐月「いつまでおんの？」

百合子「久しぶりに帰って来た姉に対して第一声がそ
れ？」

皐月「ごめん」

百合子「産んでちょっと落ち着くまで」

皐月「予定日いつ？」

百合子「来月の頭かな」

皐月「あとひと月もないな」

百合子「うん」

皐月「……怖い？」

百合子「何が」

皐月「産むの」

百合子「別に」

皐月「怖ないん？」

百合子「他に怖い事いっぱいあるしな」

皐月「向こうのお義母さんら怖いん？」

百合子「いや、怖ないけどしんどいわな」

皐月「しんどいんか」

百合子「それはこの家居た時からしんどかったけどな」

皐月「……」

百合子「今は産む事よりも生まれてからが怖いわ」

皐月「そうなん？」

百合子「生まれた子を私が可愛い思えるかがまず怖い」

皐月「当然可愛いやろ」

百合子「……わからん。子供を可愛い思ったことないし。

皐月が生まれた時も、なんやこの気色悪い生きもんは

思たわ」

皐月「……自分の子やったら可愛いよ」

百合子、鼻で笑う。

皐月「何？」

百合子「産んだ事あるんか？」

皐月「……そら、ないけど」

百合子「経産婦に言われても癪に障んのに、一回も孕んだ事すらない人間に言われたら、頭がち割りたなるわ」
皐月「……ごめん」

間。

皐月、立ち上がり、

皐月「私の部屋、使っていいから。ちょっと片付けるな」
百合子「私の部屋や。私が留守の間、あんたが勝手に使ってるだけ」
皐月「そうやね」

皐月、出て行こうとする。

上手レコードショップより筒井登場。
堤防に腰掛けてギターの弦を張り直す。

百合子「春に結婚するんやって？」

皐月「……一応」

百合子「なんや、一応って」

皐月「一応、そういう事になってる」

百合子「一応ちゃうで。一生やで」

皐月「……うん」

百合子、起き上がり、皐月を見つめて、

百合子「結婚って一生やで。死ぬまでやで。子供出来たらそれこそもう絶対逃げられへん、一生死ぬまでその人に、その家に、その土地に縛られ続ける言う事やで」

皐月「分かってる」

百合子「あ、そう」

皐月「……よう家出してたよな」

百合子「……昔な」

皐月「あれ、本気やったんやろ」

百合子「は？」

皐月「本気で、もう二度と帰って来るか思ってたんやろ」

百合子「……子供の遊びや。癖みたいなもんや。家出癖があっただけ」

皐月「そうは見えなかった」

百合子「あんたに何が分かんねん」

皐月「……」

百合子「無理やで」

皐月「え？」

百合子「無理。あんたには無理やから、余計な事考えんときや」

皐月「何、余計な事って」

百合子「ここから出られへん。あんたには絶対無理や。自分が何か特別な人間や思うのやめときや」

皐月「そんな事思ってたへん！ここから出ようとも思ってたへんわ」

百合子「そうか。まあそうやろな、あんたはお母ちゃんが一番のお気に入りや。その恩を仇で返す様な事できるわけないわな」

皐月「……お姉ちゃんかて大事にされてたやん」

百合子「どこがやねん」

皐月「私より広い部屋使ってたし」

百合子「姉やからな」

皐月「いつも新品の服買ってもらて、私はおさがり」

百合子「姉やからな」

皐月「たまに貰うええお菓子も、選ぶのは兄弟で私が一番最後」

百合子「姉やからな！あんたが言うてんのは全部生ま

れた順番だけの話や！ 妹のおさがりを姉が着れるか
!! 妹の方が姉より広い部屋使うか!! そんなんは建
前の事や！」
皐月「私は、お姉ちゃんも大事にされてたって言いたい
だけや」
百合子「あんたはほんま昔から要領良かったな」
皐月「……」
百合子「せやけどあんたなんか自分の力では何も出来ひ
んねんからな。勘違いせんときや。今までうまい事行
ってたんは、全部周りの人間のお陰や。あんたは一人
では何も出来ひん人間や！」

間。

皐月「部屋を片付けてきます」

皐月、退場。

百合子、しばらく静かに壁を見つめた後、手元の
雑誌を壁に投げつける。

上手堤防、筒井がギターをつま弾きだす。

⑥ 堤防（夕）

皐月、丸川家から出て堤防を登り、途中しゃがん
だり立ち止まったりしつつ上手へ歩く。

丸川家では百合子、客席に背を向け床に寝転ぶ。

上手堤防で筒井が弾くギターの音がだんだん目立
ってくる。

皐月、ギターの音色に気付き、きよろきよろ辺りを見回して筒井を発見。
筒井のギターはいつの間にか「オー・シャンゼリゼ」を奏でている。
皐月、堤防の上からしばらく筒井を見つめる。筒井、皐月の影に気付き、振り向く。

筒井「あ！」

皐月「あ……」

筒井「皐月ちゃん」

皐月「はい……」

筒井「どうしたん？」

皐月「ちよつと……」

筒井「散歩？」

皐月「はい、そうです」

筒井「そうなん。びっくりした。いつから見てた？」

皐月「ほんまに今さっきです」

筒井「恥ずかしいな、まだ下手やのに」

皐月「とっても良かったです」

筒井「まだまだやわ。暇なんやったら横おいでや。弾き

方教えたげるよ」

皐月「あ、えつと……でももう帰らんと……」

筒井「そうなん？ そろそろ暗なってくる頃か」

皐月「……あ、でもちよつとだけやったら」

筒井「そう？」

皐月、ゆっくりと土手の斜面を筒井の横まで下りる。

筒井「今弾いてたの何か分かった？」

皐月「……オー・シャンゼリゼ」

筒井「そう！　よう知ってたな！」

皐月「前に筒井さんにレコードショップで聞かせてもらいました」

筒井「うそ、一回聞いただけで覚えちゃったん？」

皐月「好きなメロディやっただけ」

筒井「すごいなあ」

皐月、照れた様な表情。

筒井「あのレコードな、普段あんまり人に聞かせへんねん」

皐月「え、何ですか？」

筒井「あれ実は舶来物やねん」

皐月「え、そうなんですか！」

筒井「去年叔父さんが仕事でフランス行ってな、その時お土産で買ってきてくれてん」

皐月「えー！　すごい！」

筒井「すごいやろ！　日本では普通聞かれへんで」

皐月「日本では売ってないんですか？」

筒井「売ってない売ってない！　せやけどなんかこの曲は日本人好きそうな気がするから、いつか日本でもレコード出るかもな」

皐月「そんな聞いただけで分かるんですか？」

筒井「なんとなくやで。だって現に僕も皐月ちゃんも惹かれたやろ」

皐月「うん！」

筒井「ちよっと歌える？」

皐月「え！　無理です！　歌詞が何て言うてはるんか分からん！」

筒井「ハミングでええから。それか、ラララとか」

皐月「えー！　いや、無理です。恥ずかしい」

筒井「なんでやねん、上手いのに」

筒井、おもむろにオー・シャンゼリゼを弾きだし、
皐月に歌うよう促す。

皐月、首を振って拒否する。

筒井、何度か促した後、自分でそっとハミングを
始める。

筒井、皐月に合図を出す。

皐月が根負けしてハミングをしだすと、筒井がそ
れにハモる。

皐月、驚いたように筒井を見るが、二人、ハモった
ままサビパートに突入する。

筒井、サビパートの「オー・シャゼリゼ」のみを
歌詞で歌う。

筒井「（歌）オー・シャンゼリゼ、オー・シャンゼリゼ、
ラララ、ラララ、ラララ、ラララ……」

驚いて筒井を見る皐月。

筒井のギター演奏、サビを繰り返す。

皐月もハミングをやめ、歌詞とラララでサビを歌
う。

皐月と筒井、サビを繰り返しハモり、二人の歌声、
だんだん大きくなる。

丸川家、百合子がゆっくりと起き上がり、壁に投
げつけた雑誌を拾いあげる。

窓の外を見る様に上手側をぼーっと眺める百合子。

筒井、盛り上がってギターを弾きながら立ち上が
り小躍りするようにリズムに乗る。

皐月もつられて立ち上がり、体を揺らして歌う。
照明、徐々に夕闇へ。
しばらくサビを繰り返した後、演奏止まる。
皐月と筒井、笑い合って斜面にへたり込むように座る。

丸川家の百合子、部屋の奥へ退場。

筒井「やっぱりうまいな、皐月ちゃん」

皐月「筒井さんの演奏があったから」

筒井「弾き方教えるって言ったのに歌わせてばかりで
ごめん」

皐月「いえ、全然」

筒井「皐月ちゃんの歌一回ちゃんと聞きたかってん」

皐月「え……」

筒井「オー・シャンゼリゼの歌詞のサビってどんな内容
か知ってる？」

皐月「内容？ 知らないです。筒井さん分かるんですか？」

筒井「いや、叔父さんに聞いてん。晴れてても雨降りでも
真昼でも夜中でもシャンゼリゼ通りには君が欲しい
ものは何でもある、そんな意味らしいわ」

皐月「へえ……シャンゼリゼって通りの名前やったんで
すね」

筒井「そう、フランスのな」

皐月「フランス……遠いなあ……」

筒井「せやな」

皐月「星もフランスも同じですな」

筒井「え？ 星？」

皐月「星はすごくきれいで、でも遠くてそこには行けへ
んし手で触って間近で見える事も出来ひん。フランスも、
きつと綺麗な場所で欲しい物が何でも揃ってるシャン

ゼリゼ通りがあるって分かってんのに、遠くへ行けへん。この目で間近で見る事も出来ひん。星もフランスも、同じです」

筒井「少しの間の後笑い出す。」

皐月「何で笑うんですか!!」

筒井「だって、何も同じじゃないから」

皐月「そら違うけど、でも同じですよ！どっちも憧れで、でもたどり着けへん場所です！」

筒井「ごめん、まず僕は地球以外の星に行きたいとは思わへんわ」

皐月「ああ」

筒井「ほんで、フランスは行けるで、普通に」

皐月「え、普通には行けませんよ！」

筒井「いやまあ、そら自転車で普通には行かれへんけどな、行きたい思うんやったら行ける場所や。しかも住みたい思ったら住める場所。星とは全然ちやうわ」

皐月「：：住めるって」

筒井「いや、そら住むとなると言葉とか仕事とか、すんなりはいかんで。せやけどほんまに行きたい思うんやったらな、いつでも行けるとこやん」

皐月「そうなんでしょうか：：」

筒井「世界地図に載ってる場所で行かれへんところなんかほとんどないで」

皐月「：：今までずっと、どこにも行かれへん気がしてた。今もしてます」

筒井「：：ま、そういうのはあるな」

皐月「ありますか？」

筒井「そらあるよ。ずっと地元に住んでたら、なんや自分はこのから出んまま生涯を終えて行くんちやうかってふと思う事がある」

皐月「筒井さんはここにずっと住んでるんですか？」

筒井「うん、今はこの堤防から東にちよつと行つたとこに住んでるけど地元は滋賀。」

皐月「滋賀！琵琶湖行つた事ありますか？」

筒井「ある言うか、僕の部屋の窓から琵琶湖見えてたわ」

皐月「えー！いいなあ」

筒井「琵琶湖好きなん？」

皐月「琵琶湖が好きっていうか、大きい水が好き」

筒井「大きい水って」

皐月「どこまでも続いているみたい。ぼーっと眺めてると、気が遠くなっているって、自分の体が水の上漂ってどこかに行きつけるような気になって来るから」

筒井「琵琶湖では対岸についても滋賀やけどな」

皐月「現実には関係ないんです。そういう気になればいい」

筒井「そうか。僕はここの方が好きやな」

皐月「なんで？」

筒井「一番は、店があるからかな」

皐月「レコードショップ？」

筒井「うん。好きやねん、あの店」

皐月「：：そっか」

筒井「ただのバイトやねんけどな。なんか自分の店みたいに思えて来て」

皐月「ほとんど毎日いますもんね」

筒井「そう。長いこと勤めてるうちに皐月ちゃんや景子ちゃんみたいな常連さんとも仲良うなつてしもたしな。なんやここ、離れたないな、好きやな、思えてきてしもてん」

皐月「：：いいですね」

筒井「ええんかな？」

皐月「居場所ですね」

筒井「居場所：：やな」

皐月、立ち上がる。

筒井「帰るん？」

皐月「はい、門限あって。気付いたらもうこんな暗くな
っちゃってました」

皐月、筒井に背を向け、歩き出す。

筒井「あ、待って」

筒井、ギターのストラップを肩から外し、皐月に
差し出す。

皐月「え？」

筒井「僕、明日から試験やねん。今期一つでも単位落と
したら留年確定」

皐月「……え？」

筒井「だから、これ預かっていて」

皐月「私が？」

筒井「うん。好きなだけ弾いていいよ」

皐月「いや、でも私……」

筒井「頼むわ、預かってくだけでええから。近くにあつ
たらつい手伸びてしても勉強出来ひんねん」

皐月「……じゃあ、大事にお預かりします」

筒井「ありがとう！　ほんま助かるわ！」

皐月、ギターを受け取り、大切そうに抱える。

筒井「ごめん、ケース無くて。持ちづらいよな」

皐月「大丈夫です」

筒井「家まで送るか？」

皐月「いえ、父に見つかったら怒られるので」

筒井「そうか、怖いな」

皐月「今日は楽しかったです。ほんまに」

筒井「僕も楽しかったよ」

皐月「ありがとうございます」

皐月、ギターを抱えて堤防を登り、下手へ歩きだす。

筒井「皐月ちゃん！」

皐月、振り向く。

筒井「居場所な」

皐月「え？」

筒井「居場所！居場所ってな、自分で見つけなあかんで！ここに居たいと思う場所が見つかったら、それが居場所になんねん」

皐月、少しの間の後、筒井にお辞儀して下手へ。

筒井、皐月の後姿を見送り、しばらくしてからレコードショップへ入り退場。

⑦丸川家・外（朝） 一九七一年 一月

コートとマフラーを着込んだ景子、堤防を越えて手前に滑り下りて来、丸川家を訪ねる。

景子「おはようございます！」

志保の声「はい」

志保、少しして部屋の奥から登場。

志保「あ、景子ちゃん」

景子「明けてましておめでとうございます！」

志保「おめでとうございます」

景子「本年もどうぞよろしくお願い致します！」

志保「こちらこそ、今年も皐月と仲良くしてやってね」

景子「はい！」

志保「皐月やね？　ちよっと待っててね」

景子「ありがとうございます」

志保、室内に引き返そうとしてすぐに戻って来る。

志保「景子ちゃん」

景子「はい？」

志保、周囲を気にして家から出、景子に近付く。

志保「卒業したら結婚するんやんね？」

景子「……はい」

志保「牛窪さんとかやって聞いたんやけど……」

景子「そうみたいです」

志保「そうみたいって……大丈夫なん？」

景子「大丈夫です！」

志保「息子さんと会った事はあんの？」

景子「2、3回会ってます」

志保「2、3回か……」

景子「父が選んだ人なので、問題ないと思います」

志保「お父さんが……そう……」

景子「ご心配頂いてありがとうございます」

志保「いや……。勝手な事言うてその……無責任や思うねんけど……景子ちゃん、昔からお勉強ようできたやん？」

景子「いや、よう出来た言うほどでは」

志保「いつも皐月に教えてくれて」

景子「皐月ちゃんは皐月ちゃんで、私に色んな事教えてくれてるので」

志保「色んな事？ あの子に教えられる事なんかあんの？」

景子「色々です」

志保「そう……。だからね、その……景子ちゃん、進学しはるんかな思ってたんよ、おばさん」

景子「はい」

志保「景子ちゃんのお母さんはもしかしたら嫁いだ方がいいって思ってるかもしれないけど、お父さんは景子ちゃんの事、大学か短大に入れはるんちゃうかなって」

景子「……はい」

志保「だからね、その……ごめんね、まとまりのない話やねんけど……景子ちゃんは……」

景子「おばさん、うちの母と同級生でしたっけ？」

志保「うん、そうよ」

景子「ご存知やと思いますけど、母ってものすごい保守派なんです。髪の毛さえ短くさせてもらえません」

志保「うん」

景子「でも、多分母はそうやって身を守って来たんやろなと思うんです。だから私の事も、同じようにして守ろうと思ってくれてるんです」

志保「……そうやね」

景子「私、大丈夫です。ちゃんと考えてます」

志保「……そう。そうやろうね、景子ちゃん賢いから、おばさんなんか考えつかんような事かって考え付く

やろしね」

景子「そんな事ないです。誰でも思いつくような事しか
思いつきません。でもそれを実際に――」

志保「実際？」

景子「いえ、とにかく私、大丈夫なので！　ご心配あり
がとうございます」

志保「そう。ごめんね、余計な事」

景子「いえ」

志保「皐月も景子ちゃんくらい賢かったらもうちよつと
安心やねんけど」

景子「皐月は賢いですよ。それで、私よりずっと優しい
です」

志保「……：：：そうかな」

景子「優しいからしんどい事も、足引つ張られる事も、
溺れてる誰かを助けようとして一緒に沈んでしまう事
もあるかもしれません。でも、それは賢いとか要領い
いとか、そういう事よりも多分ずっと大事な事なんや
と思うんです」

志保「ありがとうございます」

景子「私が皐月から教わってる事って、そういう事です」

志保「ありがとうね。ごめんね、寒いのにこんなとこで
長々と」

景子「いえ、最後におばさんと話せて良かったです」

志保「え？」

景子「卒業する前につて意味です」

志保「あ、うん。おばさんも嬉しいわ。すぐ皐月呼んで
来るね」

志保、室内へ退場。

景子、寒そうに待つ。

志保の声「皐月ー！」

皐月の声「景子来た!!」

景子「（大声で）来たでー！」

⑧ 堤防（朝）

少しして皐月、駆け出て来る。

皐月「明けましておめでとう！」

景子「おめでとうございます！」

皐月と景子、連れ立って堤防へ。

皐月「わ！雪積もってるやん！」

景子「ちよつとだけな」

皐月「降ったん気付かんかったわ」

景子「私も。朝出たらこうなってた！」

皐月「どうりで夜寒かったはずや」

滑り落ちそうになりながら堤防を登り、上手へ歩く。

皐月「何お祈りする？」

景子「明るい未来！」

皐月「ざっくりやな」

景子「皐月は？」

皐月「健康と景子の事と……」

景子「私の事は自分で祈るからええよ」

皐月「あと、ギター上手になりたいねん」

景子「え、買ったん？」

皐月「ううん、借りてる」

景子「誰に？」

皐月「筒井さん」

景子「え！　ちよっと！　いつの間に私抜きで二人で会ったりしてんのよ！」

皐月「1回だけたまたまや！」

景子「たまたま会うてたまたまギター借りたりするか!!」

皐月「世の中には不思議な偶然というもんがあんねん」

景子「うわ、なんかむかつくわ」

皐月「でももう返さなあかんわ。試験期間預かつといえて言われただけやのに、もう3か月も借りっぱなしやねん」

景子「それはもう泥棒やな」

皐月「ちやうわ！　何回も返しに行つてんで。でも私門限5時なつてしもたやん？　筒井さんその時間まだおらんこと多くて……」

景子「ああ」

皐月「そろそろほんまに返さな」

景子「もうええんちやう？　もらつても」

皐月「え!!　あかんよ！　高価なもんやのに！」

景子「まあ、あかんか、さすがに」

皐月「さすがにな」

景子「ほんなら私は皐月の事祈つたるわ」

皐月「何？」

景子「ギターが上手くなって、筒井さんにギターをプレゼントしてもらえますように」

皐月「あかん！　いらんし！　家やったら弾けへんし」

景子「なんで？」

皐月「お父さん音楽嫌いやから」

景子「そんな人おる？」

皐月「普通におるやろ」

景子「ふーん。ほんなら今はどこで練習してんの？」

皐月「外。その辺」
景子「そうなん」

上手堤防下、閉まっているレコードショップ前を
通過し、抱っこ紐を下げた百合子と丸川健介（23）
が登場。

健介、堤防上の皐月を見つけ、

健介「あ！　おい！　皐月！」

皐月「あ！」

景子「誰やっけ？」

皐月「兄と姉。昨日から帰って来てんねん」

景子「あ、そうなん」

皐月「初詣行ってたん？」

健介「おう。皐月今からか？」

皐月「うん」

健介「すごい人やで。風邪やらもらわんようにな」

皐月「うん」

景子「明けてましておめでとうございます」

健介「ん？　景子ちゃん？」

景子「え？」

健介「景子ちゃんやな!!　大きくなったな！」

景子「私の事知ってるんですか？」

健介「知ってんで！　小っちゃい頃よう遊びに来とった

やん。こっち誰か分かるか？」

景子「えっと、お姉さん」

健介「そうや、それと子供な！」

景子「こんにちは（百合子に）」

百合子「どうも」

景子「そっちに赤ちゃん見に行ってもいいですか？」

健介「ええよ！　おいで！」

皐月「景子」

景子「やったー！」

百合子「（健介に）ちよっと、勝手にやめて」

皐月「（小声で）お姉ちゃん気難しいから」

景子、無視して堤防を滑り下りる。

皐月も後を追って仕方なく下りる。

景子「見ていいですか？」

百合子「……触らんといてな」

景子「はい！」

景子、百合子の抱っこ紐の中を覗く。

景子「……めっちゃ可愛いです」

百合子「……うん」

景子「え、めっちゃ可愛いですよね！　ちよっと、この

地区で一番くらい可愛いんちやいます!!」

百合子「……地区と違って、地球の間違いやろ」

景子「すみません！　間違いました！　宇宙で一番可愛

いです！」

百合子「せやろ」

健介「あんまり調子乗らせたらあかんで」

景子「いや、ほんまに！　ほんま可愛いです！」

百合子「……見る目あるやん」

健介「なんや、そんな褒められるんやったら俺も子供連
れてきたら良かったわ」

景子「お兄さんお子さんいらっしゃるんですか？」

健介「いるで、二人。でも今下が熱出しとんねん」

景子「え、大丈夫ですか？」

健介「毎年年年末年始どっちかが熱出すんよ」

皐月「そう言えば去年も正月兄ちゃんだけ帰って来てたな」

健介「そうやん、ほんまかなんわ」

景子「へえ」

健介「そういうもんやで、子供って。今だけはやめてくれって思う時に熱出すし、それだけはせんとってくれ思う事をドンピシャでやりよんねん」

景子「大変そうですね」

健介「いやほんまにな」

百合子「他人事ちゃうで」

景子「え？」

百合子「聞いたで。牛窪さんとこ嫁に行くんやろ」

景子「ああ……」

健介「そうなん!!　　そうかあ、ほんならやりたい事出
んの今のうちやな」

景子「そうですね」

健介「もう、結婚してからは自分の時間なんかほとんど
ないからな」

景子「はい」

健介「今たっぷり遊んで、後悔せんようにしときや」

景子「はい」

皐月「……やっぱりそうなんやろか？」

健介「ん？」

皐月「いや……なんていうか」

百合子「当たり前やろ」

皐月「でも、今もやりたい事できる？」

健介「なんや、何がやりたいねん」

皐月「いや、何がとかそう言うん違ごて」

百合子「別にこれと言って何も無いねやろ」

皐月「……そういうことちゃうくて……だって……例え
ばなんかやりたいことあるとして、今しか出来ひんで

って言われても、じゃあ今は今で出来んのかって考えたら、別に今かって出来ひんって言うか……」

健介「なんやなんや、哲学か？」

皐月「そんなんちゃうわ」

健介「景子ちゃん、皐月にあんまり難しい話教えんといてや。こいつアホやから処理しきれんようになるさかい」

景子「私は何も――」

皐月「他人の受け売りちゃうわ」

健介「せやから今やりたいけど出来ひん事って何や」

皐月「いや、いい。なんでもない。もう行こ」

景子「あ、え？ いや……」

健介「え？ なんやねん。怒ってんのか？」

百合子「どうせただの漠然とした話や、ほっとき。今自分が思う様に出来てへん事を言い訳して甘えてるだけやろ」

皐月「そんなんちゃう！」

百合子「ほな何が言いたいねん！ 今かって環境のせいでやりたい事出来てへんって恨み言言いたいだけやろ！」

健介「百合子、やめろや。喧嘩ふっかけんな」

皐月「……」

景子「……は、初詣、行こか。ほんで、何か屋台で買お。

お芋とか栗とか甘いもん！」

健介「おう、おう、そうしい！ 小遣いやろか！」

皐月、真顔で足元を見ている。

皐月「……なんか、皆言うやん。若いうちにやっとけよ、学生のうちに遊んどけよ、綺麗なうちに、元気なうちに、時間のあるうちに、自由の利くうちに……とか。でも、それってもうその先出来ひんようになるの前提

で言うてるわけやろ？」

百合子「何言うてんの、あんたほんま。出来ひん様な

ねん、実際」

皐月「ちやう！」

百合子「違わへん！」

皐月「ちやうって。上手い事言われへん。……でも、な
んでそんな悲しい事言うん？」

百合子「……」

皐月「皆、全員歳とるやん。歳とる事も、皺が増える事
も、腰が曲がって来る事も、時間の融通利かんように
なる事も全部分かつてるけど、どうしようもないやん。
それをさ、じゃあそうなたら何も出来ひんのかって
言うたら、絶対そんな事ないはずやん。そんな、そん
な事が妨げになつて出来ひん様な事やったら、別に若
い時にもやらんでええ事なんちやうの？」

景子「皐月？」

皐月「そんな事言われてもさ……じゃあだからって今や
ったら何でも出来る訳でもないし、今出来たとて、今
だけ出来たらもう一生やらんでも満足っていう訳でも
ないやろし」

健介「大丈夫か、お前」

皐月「人生をさ、そんな儚いもんみたいに言わんとい
ほしいねん、私は。今しかないみたいに、今だけが人
生で大事な時みたいと言わんと……全員自分の今をさ、
生きてさ……未来にも期待して、過去も抱きしめて……
……そうやって最後まで……人生の端から端まで全部や
って見せてほしいねん」

間。

百合子「やっぱりあんたは他力本願やな」

皐月「え？」

百合子「なんやまとまらん演説長々してたけど、最後は結局、『全部やって見せてほしい』で終わってるやん」

皐月「……」

百合子「やってみせてほしい？ 誰に？ なんで誰かがあんたに見本を見せてくれると思ってるん？ いつまで甘えとんねん」

皐月「……：：：そうやね。その通りやね」

健介「……：：：おいおいおい。ほんまやめてくれや元日から。七一年早々、幸先悪いわ」

皐月「ごめんなさい」

健介「うん……：：：景子ちゃんごめんな、なんかこいつが訳分からん事急に言い出して」

景子「いえ。私は分かったんで」

健介「……：：：あ、そう？ さすが景子ちゃんやな」

百合子、黙って下手へ歩き出す。

健介、百合子が行くのに気付いて、

健介「あ、ほな俺らもう帰るな。景子ちゃん、寒い中ごめんやで。風邪ひかんといてな」

景子「はい、ありがとうございます。お兄さんも」

健介「うん、おおきに！ ほな、またな！」

景子「お子さんお大事に！」

健介、皐月と景子に手を振って慌てて百合子の後を追いかける。

健介、百合子、下手に退場。

皐月、俯いて肩を震わせている。

景子「……大丈夫？」

皐月「……あかん」

景子、皐月の手をとる。

皐月「いつも私がそんなんしたら気持ち悪い言うくせに」

景子「今も気持ち悪いけどな、我慢してんねん」

皐月「我慢せんでええわ！」

景子「……あ！筒井さん！」

皐月「え!!」

皐月、周囲を見回すが筒井の姿はない。

皐月「どこ!!」

景子「嘘」

皐月「は!!なんでそんな嘘つくかな！」

景子「元氣出るかな思って」

皐月「ぬか喜びやん！」

景子「やっぱちよつと喜んだんや」

皐月「うわー、しらけるわー」

皐月と景子、顔を見合わせて小さく笑い合う。

筒井、堤防の上、上手側から茶色い紙袋を持って

登場。

堤防の下の皐月と景子に気付き、

筒井「おーい！」

皐月、景子、驚いて振り向く。

皐月「あ！え!!」

景子「わあ！　筒井さん！」

景子、手を振る。

筒井、振り返す。

筒井「久しぶりやな！　何してんの？」

景子「これから初詣です！」

筒井「これから？　もう昼過ぎてんで」

景子「え!!　ぎりぎり昼前には着くつもりやったのに！」

皐月「ごめん」

景子「いや、別にええよ」

筒井「二人とも、栗好き？」

皐月「栗!!」

皐月、景子、驚いて顔を見合わせる。

景子「大好きです！」

筒井、堤防を歩いて降りて来て皐月に紙袋を差し出す。

筒井「これ、あげるわ」

皐月「え？」

皐月、受け取って中身を見る。

皐月「栗！　あったかい！」

景子「いいんですか？」

筒井「うん、ほんまは買うつもりなかったんだけどさ、あんまりええ匂いやったからついな」

皐月「でも、筒井さん食べようと思って買ったんですよ」

ね？」

筒井「来る道でだいぶ食べたから。それに、ほんまはそんな栗好きちゃうねん。でも無性に食べたなつて」

景子「ああ、分かる！　そういう時ありますよね！」

筒井「あるよな。残りどうしよかな思ってたところやねん」

皐月「ありがとうございます。嬉しい」

景子「ありがとうございます！　お腹空いて来てたんです」

筒井「ほんならちようど良かった、気にせんといて。じゃ、今年もよろしく！　また店遊びに来てや」

筒井、下手へ歩き出す。

皐月「あ！　筒井さん！」

筒井「ん？」

皐月「あの、ギター借りっぱなしでほんますみません！」

筒井「ああ」

皐月「ほんまに、何回か返しに行ったんですけど、私門限5時なつてしもて」

筒井「5時!!　めっちゃ早いやん」

皐月「はい、ほんで、全然筒井さんがお店出てる時間に被らんようになってしもて」

筒井「それでか。全然来てくれんようになったから僕嫌われたんか思たわ」

皐月「日曜やったら昼間もいてはるか思ってたんですけど」

筒井「ああ、ごめん。最近日曜実習の事多いねん」

皐月「そうなんですか。ほんま、すみません。盗るつもりちゃうんで、絶対返すんで」

筒井「かまへんよ。俺が預かっててって頼んだんやし」

皐月「すみません」

筒井「ちよつと弾いてみた？」

皐月「……はい」

筒井「楽しいやろ」

皐月「はい、めっちゃ」

筒井「せやろ」

皐月「あ！あの、うちここからそんな遠くないんで、

良かったら今取って来ます！」

筒井「家どっち？」

皐月「あ……」

景子「ちよつとあっち行って、あっちです」

景子、実際の皐月の家とは違う方向を指す。

筒井「そうか。ごめん、俺今から向こうで友達と会う予

定あんねん。反対方向や」

皐月「あ、そうですね……」

筒井「もうちよつと預かつといてもろてもええ？」

皐月「はい、私は……筒井さんがいいなら……」

筒井「おおきに。邪魔やのに堪忍な」

皐月「全然」

筒井「ほな、また」

筒井、堤防を上がる。

皐月「あ！」

筒井、振り向く。

景子「今度は何？」

皐月「（小声で）レコードショップに置かせてもらお」

景子「何を？」

皐月「景子の荷物やん！隠す場所探そ言うてたやろ！」

景子「あ！ え、でも無理ちゃう？」

皐月「なんで？」

景子「だって、あの店狭いし、筒井さんバイトやし……」

皐月「頼むだけ頼んでみたらええやん！」

景子「でも何て説明したら……」

筒井「どうした？」

景子、困り顔で皐月を見る。

皐月「あ、あの！」

筒井「ん？」

皐月「あの、レコードショップでちよつとの間、預かってほしい荷物があるんですけど、いいですか？」

筒井「いいよ」

皐月・景子「え!!」

筒井「バックヤードに置いといたるわ」

景子「え、いいんですか？ 理由も中身も聞かんと」

筒井「え、何？ 持ってたらずいもんなん？」

景子「いえ、そういう訳じゃ……」

筒井「ほんなかまへんよ、荷物置くくらい」

皐月「ありがとうございます！」

筒井「年明けから講義の時間変わるさかい、月・木は昼過ぎから夜までシフト入ってんねん。いつでもおいで」
景子「はい！ お願いします！」

筒井、手を振って堤防上を下手へ退場。

皐月、景子、手を振って筒井を見送る。

皐月、景子、顔を見合わせてくすくすと嬉しそうに笑い合い、栗を分け合いながら上手へ退場。

⑨ 堤防（朝）

長袖のセーラー服にマフラー姿の皐月、堤防上で自転車に跨って景子を待っている。周囲を見渡しても待てど暮らせど景子は来ない。しばらくして皐月、諦めて一人で自転車を漕いで上手へ退場。

⑩ 堤防（夕）

皐月、上手から自転車に乗って登場し、堤防の上で自転車を停めて周囲を見回す。しばらくして筒井、レコードショップから出て来る。

筒井「あ、皐月ちゃん！」

皐月「どうも」

筒井「今日やんな？ 荷物置くの」

皐月「はい、のつもりなんですけど……」

筒井「どうしたん？ 何も持ってへんやん」

皐月「あの、景子の荷物で」

筒井「あ、そうなんか。景子ちゃん遅れてるん？」

皐月「えっと、それが、分かんなくて」

筒井「え、そうなん？」

皐月「いつも一緒に学校行くんですけど、今日来なくて」

筒井「え、大丈夫なん？ いつも休む時連絡とかは？」

皐月「あの子、休んだ事なかったんです」

筒井「そうか……」

皐月「今日筒井さんと約束してたから夕方にはここ来る

かな思ってたんですけど」

筒井「どうしたんやろ、心配やな」

皐月「すみません、場所空けてくれてはったやろうに」
筒井「いや、そんなにかまへんけど……電話番号知ってるん？」

皐月「それは、はい」

筒井「店の電話でかけてみたら？」

皐月「え、いいんでしょうか？」

筒井「うん、ええよええよ。心配やん」

皐月「……ありがとうございます」

皐月、自転車は置いたままゆっくり堤防を下りる。
筒井、皐月が下りて来るのを待って一緒にレコードショップへ入店。

⑪ レコードショップ（夕方）

店内の黒電話に案内され、皐月、ダイヤルを回す。

皐月、受話器を耳に当て、しばらく待つが誰も出ず、筒井に黙って首を振って見せる。

皐月が受話器を置こうとした時、電話口から声。
慌てて再び受話器を耳に当てる皐月。

皐月「もしもし。あ、丸川と申します。はい、皐月です。
あの……え？ あ、はい、元気です。はい、母も。あの、景子いますか？……え？」

長い間。

受話器を耳に当てたまま微動だにしない皐月を少し離れた所からじっと見つめている筒井。

皐月「……え……っと……。それは……え？ ど、どう
いう事……：……なんでしょうか？」

沈黙の後、突然勢いよく受話器を置き、学生鞆を忘れたまま店から飛び出す皐月。

筒井「皐月ちゃん!」

筒井、皐月を追いかけて店の外へ。

皐月、素早く堤防を駆け上がり、自転車に乗って下手袖へ消える。

呆然と立ち尽くす筒井。

しばらくして筒井、レコードショップの中へ。

筒井、ゆったりとした動作でレコードをかける。

次第に日が陰り、照明、夜へ。

筒井、レコードショップ内でうたた寝し始める。

下手側、丸川家では志保と弘子が夕食を食卓に並べ始める。

皐月、自転車を押して堤防の上を下手から登場。

無表情のまま自転車を堤防の上に停め、放心状態の様子で堤防を手前に下りる。

皐月、足を滑らせ、堤防斜面をずり落ちる。

筒井、皐月が落ちる音で目覚め、店から出る。

筒井「皐月ちゃん!」

筒井、皐月に駆け寄るが、皐月、座り込んだまま反応しない。

筒井「どうしたん!! 大丈夫か!!」

皐月の足を見る筒井。

筒井「赤いな。ひねった？」

皐月、首を横に振る。

筒井、皐月の足首に触れるが、
皐月、足を引つ込める。

筒井「ごめん」

皐月、しばらく呆然と斜め下を見つめているが、
やがて筒井の顔を見る。

筒井「……景子ちゃんは無事か？」

皐月「（小さく頷く）」

筒井「事故とかそんなとちやうかつたん？」

皐月「（小さく頷く）」

筒井「（ほっとして）そうか……。景子ちゃんには会えた
ん？」

皐月、筒井の顔を見つめたまま、泣き出す。

筒井「え!! どうしたん!! ちょ……」

筒井、周囲を見回す。

筒井「な、どうしたん? どこ行ってたん？」

皐月「（黙って泣く）」

筒井「ちよっと、とりあえず中入るか。な? 寒いし。」

風邪ひいてしまうわ」

皐月、動かない。

下手側、丸川家では食卓に食事が揃い、雄一郎と康作が奥から出て来る。

皐月がない事に雄一郎が腹を立てている模様。

筒井「ほんならちよつと待ってて、なんか上着持ってくるわ」

皐月「牛窪さんどこ行ってきた」

筒井「え、ごめん、誰？」

皐月「景子、学校辞めてた」

筒井「え!!」

皐月「景子……学校……辞めてた。……嫁に行ってもてた！」

筒井「……そうなんか」

皐月、声を上げて泣く。

筒井、黙って皐月の横に座る。

皐月、しばらく声を上げて泣き続け、やがてすすり泣く。

丸川家、雄一郎が懐中電灯を持って外へ。
堤防を上がり、皐月を探し出す。

筒井「……知らなかったん？」

皐月「……卒業してからのはずやった」

筒井「そうなんや」

皐月「……会わせてもらえへんかった」

筒井「牛窪さんっていう人？ 旦那さんが出たん？」

皐月「ばばあや！」

筒井「ばばあって……お義母さんやな」

皐月「こんな嫁入りちゃう、誘拐や！」

筒井「……何て言うていいか」

皐月「あとちよつとやつたのに」

筒井「せやな、もうちよつとで卒業できたのにな」

皐月「……」

筒井「なんか事情があつたんやろな」

皐月「……ばれたんや」

筒井「何が？」

皐月「……」

少しの間の後、筒井、『上を向いて歩こう』をくちずさみ出す。

筒井「（歌）上を向いて歩こう　涙がこぼれないように」

皐月「……やめてください」

筒井、皐月を無視して軽く指を鳴らしながら優しく歌い続ける。

筒井「（歌）思い出す夏の日　一人ぼっちの夜　幸せは雲の上に　幸せは空の上に」

筒井、皐月を見る。

皐月、黙って俯いている。

筒井「（歌）上を向いて歩こう　涙がこぼれないように」

皐月「（歌）泣きながら歩く」

筒井・皐月「（ハモリ）一人ぼっちの夜」

皐月と筒井を雄一郎の懷中電灯が照らす。
眩しそうに振り向く二人。

雄一郎「皐月！ 何しとんねん！」
皐月「お父ちゃん！」

雄一郎、どしどしと堤防を下り、皐月の腕を掴む。

皐月「痛い！」

雄一郎「あほかお前は！」
筒井「待ってください！」

雄一郎、筒井を鋭く睨む。

雄一郎「己、うちの娘に何してくれたんや」

筒井「僕は――」

皐月「ちやうねん、お父ちゃん！ 門限破ってごめんなさい！ けどこの人なんも悪ない！ 悪いの私やねん！」

雄一郎、皐月から手を離し、皐月の頬を叩く。
転ぶ皐月。

下手側、丸川家、夕食が終わり、弘子が片付けしている。

志保、上着を着込んで外へ。

皐月と雄一郎を探して堤防の上を上手へ向かう。

筒井「お父さん！ いくら門限破ったからって理由も聞かんと！」

雄一郎「もっぺんお父さん言うてみ、二度と口利けんよ

うにしたるからな」

雄一郎、地面に倒れている皐月に近付こうとするが、筒井、立ちふさがる。

雄一郎「どういうつもりや！ だけ！」

筒井「どきます。でも女性に手上げるのは反対です」

雄一郎「お前に反対する権利なんかないわ！」

筒井「では反対ではなく、犯罪です。虐待です。実の娘やからって好きにしていえ訳とちやいます。親の管理下にいるからって思い通り出来る訳でもありません。それを暴力でねじ伏せて言う事聞かせようなんて野蛮な考えは通用しません」

雄一郎「己何様のつもりや」

筒井「僕は筒井と言います。もう二度と彼女に手上げへんとここで約束して下さい。さなければ、すぐ警察に通報します」

雄一郎「はあ！ 警察！ これは躰や！ そんな事で警察が動く訳ないやろ！ お前の方がよっぽど犯罪者ぢやうんか！ 若い娘こんな時間まで引っぱり回しよつて！」

筒井「引っぱりまわしてはいません」

皐月「私が自分でここに来てん。この人何もしてへんねん」

雄一郎「お前は黙つとれ！ そういう問題ぢやう！」

志保、皐月達を見つける。

志保「皐月！！」

皐月「お母ちゃん！」

雄一郎「お母ちゃん」

志保、慌てて堤防を下り、足を滑らせる。
雄一郎、駆け寄る。

雄一郎「大丈夫か!」

志保、態勢を立て直し、雄一郎を素通りして皐月の元へ。

志保「どないしたん、こんな汚れて」

皐月「……ごめんなさい」

志保「ごめんなさいちゃう。どないしたんで聞いてんねん」

皐月「……この斜面、滑り落ちてしもて」

志保「(筒井に) 助けてくれはったんですか?」

雄一郎「え?」

筒井「いや、助けては……」

皐月「そう! そうやねん。足ひねって立たれへんかって、この人がその店から出て来てくれはってん」

雄一郎、筒井の顔を見る。

志保、筒井に歩み寄り、

志保「ほんますみません。ありがとうございました」

筒井「いえ、僕は何も……手当も出来てませんし……すみません」

志保「そんな事ありません。ほんまに助かりました。もしかして、家まで送ってくれはるおつもりでした?」

筒井「いえ……まあ、必要とあらば」

志保「すみません、家の場所教えたらあかん言うてあつて」

筒井「それは、当然です。用心に越した事ありません」

志保「お父ちゃん、この人にお礼言うてくれた？」

雄一郎「……」

筒井「あ、いえ、僕お礼言われるような事何もしてませんから」

雄一郎「……おおきに。何も知らんと、すまんかった」

筒井「……いえ」

志保「……立てるか？」

皐月「うん」

志保、皐月を支えて立たせる。

志保「お父ちゃん、皐月の自転車押してきてくれる？」

雄一郎「……うん」

皐月「おおきに。すみません」

志保「ほな帰るで」

筒井「お気を付けて」

志保「ほんまありがとうございました」

皐月「ありがとうございました」

雄一郎、自転車を押しながら堤防の上を下手へ歩く。

皐月、志保に支えられながら時々筒井の方を振り返りつつ堤防の下を下手へ歩く。

筒井、3人の後姿を見送る。

⑫ 堤防（夜）

丸川家に帰宅する皐月、志保、雄一郎。

雄一郎、自転車を停めると黙って家の中へ入り、奥へ退場。

3人を見送っていた筒井、空を見上げ、堤防の斜面に仰向けに寝転ぶ。

皐月「お母ちゃん……ごめん」

志保「……郵便見て来てくれる？」

皐月「……うん」

志保、家の中へ入り、居間でコートを脱ぎつつ部屋の中へ。

皐月、丸川家の郵便受けを覗き、一枚の封筒を取り出して宛名を見る。

慌てて封を切り、その場で便箋を取り出して読み始める皐月。

志保、湯呑を二つ持って部屋の奥から居間に出て来る。

座ってお茶を飲む志保。

手紙を読み込んでいる皐月。

どこからともなく景子の口笛の音が3回鳴る。

堤防裏手から、白無垢を着て綿帽子を被った景子、登場。

上部から吊るされた無数のLED電球が星の様に細かく光り始める。

景子「皐月へ。ごめんな。無理やったわ」

景子の姿は誰にも見えていない。

皐月、手紙を黙読し続ける。

景子「せっかく筒井さんにまで頼んでくれたのに、堪忍

してな」

皐月「嫌や」

景子「私、卒業より一足早く結婚する事になってしまいました」

首を横に振る皐月。

景子「でかい口利いてたけど、結局は私も皆の希望の光にはなられへんかったわ。皐月のヒーローにもなられへんかった」

皐月「何で？」

景子「家出しようとしてる事も、親のお金くすねてた事も、全部ばれてしまいました。父はすぐに学校に電話して、退学の手続きをしに行きました。母はものすごく泣いてました」

皐月「……」

景子「本気やったら、その晩にでも逃げ出す事も出来たんかもしれませんか。けど、お母ちゃんが今まで見た事ないほど大粒の涙流して、うちの顔あまりにもじっと見るもんやから、なんかその場から動かれへんようになってしもた」

皐月「東京……行く言うたくせに」

景子「東京行く言うた時は、本気やった。せやけどお母ちゃんに、『家族を捨てる氣やったんか』って言われて私、なんか怖気づいてしもた」

皐月「そんな事で……」

景子「私が出て行った後、うちの家族はどうなるんやろ、周りからどんな事言われたりされるかもしれないのやろ……そんな事、元々分かってたんやけど、急に怖くな……って」

皐月「そんなんあんたのせいちゃう」

景子「家族を捨てるなんて、私が誰かを捨てるなんて、そんな風に考えた事なかった。私はずっと自分は囚われの身で、早くここから抜け出さなあかん思って必死になつてた。親の事を、番人みたいに思つた事もある」

皐月「……」

景子「でもそうやってお母ちゃんに泣かれたら……なんやしらん、自分が鬼みたいに思えて来て」

皐月「何でやねん！」

景子「自分は鬼みたいと思えて、お母ちゃんの事は小さい子供みたいに思えた。ここに一人で置いて私がいなくなったらこの人は死んでしまふんちゃうやろかって思えてきた。お母ちゃんに怒つてた事もあるけど、死んでしまふのは嫌や」

皐月「あほか！ 死ぬか！」

景子、皐月の方を向く。

景子「でもそう思えてん」

皐月、振り返り、景子を見る。

皐月、手紙を足元に捨てて景子に駆け寄る。

景子、白無垢のまま斜面を滑り降りる。

皐月と景子お互いに手を取り合つて地面に座る。

皐月「なんで？ なんでやの？ いつもの賢くて冷静で無鉄砲な景子はどこへ行つたん？」

景子「ごめん」

皐月「そんな着物着て」

景子「ごめん」

皐月「そんな草履では荷物抱えて駅までも行かれへんやろ」

景子「ごめん」
皐月「あんたほど綿帽子似合わへん人初めて見たわ」
景子「ごめん」
皐月「都会では結婚式の時、白無垢やなくてドレス着るんや、自分も絶対ドレスがiiiって言うてたやん」
景子「ごめん」
皐月「何で?! 何でよ……」

間

景子「家族を……捨てられへんかった」
皐月「家族を捨てたり出来ひん！」
景子「え？」
皐月「家族の事も、友達の事も、恋人の事も、誰の事も捨てたり出来ひんねん！ 人は人を捨てたり、捨てられたり出来ひん！ そんな物みたいなもんちやうねん！」
景子「……」
皐月「景子は今までもこれから、誰の事も捨てたり出来ひんし、誰からも捨てられたりしいひん！」
景子「……それ、もうちよっと早く教えといて欲しかったわ」
皐月「……賢いんやからそれくらい分かるやろ」
景子「……私は賢いんちやう。皐月の知らん部分を知ってるだけ。皐月も私の知らん事いっぱい知ってる」
皐月「知らん！ 知らんよ！ 景子から全部教わって来たんやん」
景子「そんな事ない。皐月、聞いて」
皐月「何？」
景子「お願い、卒業してからの事、自分で考えて決めて」
皐月「え？」

景子「皐月が結婚したい思うんやったらしたらええ。でも、もし他に思う事があるんやったら、頼むからそれをやつて」

皐月「……無理や。景子は出来ても、私には無理」

景子「私は出来ひんかったやん」

皐月「無理！」

景子「無理、無理って言うって事は、やりたい事あるんやろ？ 行きたいところあるんやんな？」

皐月「ない！ ないよ！」

景子「じゃあ結婚していいの？」

皐月「……景子もそうしたやん」

景子「私がしたからって真似する必要ない」

皐月「真似じゃない」

景子「お願い、東京行かんでもええよ。ただ、決めてほしい。自分で」

皐月「……」

景子「出来ひんから、無理やからって諦めて誰かの言つたとおりすんのはやめて。自分で決めてほしいねん。ほんで、皐月が代わりに見せて！」

皐月「何を？」

景子「自分の意志で決めて、自分の意志で動くところ！」

皐月「それは、景子が見せてくれるはずやったやん」

景子「ずるい事言うてんのは分かつてる！ でも見せて！ あんたがやって見せて！ 私に見せて！ クラスの皆に見せて！ 私のお母ちゃんに見せて！ 筒井さんに見せて！ 皐月のお母ちゃんに見せたつて！」

皐月「……」

景子「……お願い」

皐月「……私」

上手側で斜面に寝転んでいた筒井、急に姿勢を起

こして空を見る。

景子「あ！」

皐月「え？」

景子「流れた」

皐月「え、星？」

景子「うん」

丸川家居間、志保がふと外を見、居間から繋がっている舞台手前側の縁側に腰掛け、空を見る。

皐月「流星群？」

景子「いや、たまたまやと思うけど」

皐月「あ！」

景子「また！」

皐月「あ！」

景子「あ！」

皐月、景子、空を眺める。

筒井、目を閉じて手を合わせ、祈る。

志保、手を膝に置いて静かに目を閉じ、祈る。

皐月、景子も順番に手を合わせて祈る。

ゆっくりと暗転。

⑬ レコードショップ（タ） 【三月】

皐月、堤防の上を上手から駆け出して来る。

手には卒業証書と、背中にギターケースを背負っている。

皐月、ギターケースを体の前に回し、斜面を滑り

下りる。

皐月「こんにちはー！」

少しして筒井、店の奥から出て来る。

筒井「はいい……。あ！ 皐月ちゃん！」

皐月「ご無沙汰しました」

筒井「良かった。あれからどうしてるかと思ってたけど、

元気そうやん」

皐月「その節は、ほんますみませんでした！」

筒井「僕こそごめんな。僕のせいでえらい怒られたんちやう？」

皐月「いえ、父は自分が筒井さんに勘違いして暴言吐いてしもたからあの後は大人しかったです」

筒井「そっか、良かった」

皐月「ほんまにあの日はありがとうございます」

筒井「それ、どうしたん？」

皐月「あ、ほんでこれ……」

皐月、肩からギターケースを降ろす。

皐月「長いことお借りして、すみませんでした。

お返しします」

筒井「これ、僕の？」

皐月「はい、ケースはお礼とお詫びです。良かったら使
って下さい」

筒井「いや、そんな悪いわ」

皐月「いえ、利子みたいなもんです」

筒井「でも僕が預かっというって頼んだんやで」

皐月「そうですけど、何かお礼させてもらわんと気済み

ません」

筒井「困ったなあ……」

皐月「そんな困らはるほどのもんじゃ……」

筒井「ちゃうねん、ごめん、僕実は今、これ練習してんねん」

筒井、ポケットからブルースハープを取り出す。

皐月「ハモニカ！」

筒井「ブルースハープや」

皐月「え？　どうちゃうの？」

筒井「ハモニカの中で、この息入れる穴が横一列に十個ならんでるやつをブルースハープっていうねん」

皐月「へえ！　……でもそれって」

筒井「ま、つまりはハモニカやな」

皐月「（笑う）」

筒井「今これ練習してんねん」

皐月「そうなんですか。でも、ギターもまたやるでしょ？」

筒井「うーん、どうやろな」

皐月「やらの？」

筒井「分からね！　まずはこいつを思い通り吹けるようになってから考えるわ」

皐月「ブルースハープ吹くんやったら、ギターも下げた格好つかないですよ」

筒井「それもそうやな。ほんならもうちょっとだけギター預かつといてくれへん？」

皐月「え!!　いや、さすがにもう……」

筒井「頼むわ」

皐月「でも私、」

筒井「僕、一点集中型やねん。他のもん傍にあると気散るから」

皐月「でも私、今日で高校卒業したんです」

皐月、筒井に卒業証書の入った筒を見せる。

筒井「おお！ 今日卒業式やったんか！ おめでとう」

皐月「ありがとうございます」

筒井「そうかあ。え、ほんならもうこの堤防通らへんの？」

皐月「はい」

筒井「そうなんか。寂しなるわ」

皐月「私もです」

筒井「でもたまに店には来てくれるやんな？」

皐月「うーん……」

筒井「え、店には来てくれるやろ？」

皐月「すぐは、無理かも……」

筒井「すぐ違くてええよ！ ずっと待ってるさかい」

皐月「ずっと待ってるって、筒井さんも大学出たらバイ

ト辞めるでしょ？」

筒井「僕まだ次4回生やから」

皐月「じゃあ、あと1年？」

筒井「1年あったらさすがに5回くらいは来れるやろ」

皐月「うーん」

筒井「え!! 無理？ 家どっち？ 遠いの？」

皐月「いや、まあ、ちょっと」

筒井「じゃあ大学院も行くわ」

皐月「え？ じゃあ？」

筒井「大学院4年いたら、さすがに来れるやろ？」

皐月「大学院で何するんですか？」

筒井「今やってる勉強の続きやん」

皐月「今……何やってるんですしたっけ？」

筒井「言うた事なかったか！ 天文学やってんねん」

皐月「え！ 星の勉強って事!!」

筒井「せやで」

皐月「そうなんや……なんや、景子に聞かせてあげたかったわ」

筒井「景子ちゃん星好きなん？」

皐月「はい、詳しいです。多分天文学も興味あったんちやうかな」

筒井「そうか。ここ来た時は音楽の話しかせんかったからな」

皐月「一緒に堤防で流星群見たり、星座の名前教えてくれたりしてました」

筒井「そうなんや。皐月ちゃんは星興味ある？」

皐月「あります。でも空見上げても星座とか全然わからへんから」

筒井「星座なんか、ただ人間が目印の為に決めた物やから分からんでもいいよ」

皐月「景子もそんな事言うてました」

筒井「そやったか……今度来た時はもっと星の話もしよか」

皐月「今度……あるんかな？」

筒井「だって、お嫁に行ってしまっただけで近くにいるんやろ？」

皐月「私は会わせてもらわれへんから」

筒井「そんな今だけ、一時の事や。景子ちゃんかって鳥かごの鳥やあるまいし。なんやったらどこにでも羽

ばたいて行きそうな勢いの子やん」

皐月「……そうですね。筒井さんはなんで天文学はじめたんですか？」

筒井「なんで……せやね。子供の頃からなんか宇宙とか星とかに憧れがあったかな」

皐月「行きたいと思った事ない言うてたのに」

筒井「（笑って）せやな、行きたいのとはまたちやうわ」

皐月「ふーん」

筒井「この地球も星やろ、月も太陽も、大枠では星や。

銀河系があつて、その外にもどこまでも未知の空間が
広がりに續けてる中に無数の星と生命があつて……そう
いう事を考えてると、自分が空に浮かぶ船になつて、
どこまでもどこまでも旅に出れそうな気分になんねん」

皐月「……私が大きい水が好き言うのと似てますね」

筒井「せやな。そんな感じかもな。星を調べるとな、僕
らのルーツがなんとなく見えてくんねん」

皐月「ルーツ？」

筒井「僕ら自身や僕らが住むこの星はどうやってここに
誕生したのか、その他の星は、銀河系は、どうやって？
そういう事を辿つていく事の出来る学問の一つやと思
つてる」

皐月「へえ……」

筒井「まあ、そういうのをな、勉強してんねん」

皐月「……」

筒井「なに？」

皐月「なんかすごい……。……で、めっちゃ意外でした」

筒井「ただの音楽馬鹿と思つてた？」

皐月「ちよつと」

筒井「皐月ちゃん、はつきり物言うようになったな」

皐月「そうする事にしたんです」

筒井「その方がええよ」

皐月「……あ、でも、ギターはやっぱり返さんと」

筒井「ほんなら！」

皐月「え？」

筒井、ブルースハープを啜えて堤防の斜面に胡坐
をかいて座る。

筒井「弾いて！」

皐月「え!!」

筒井「練習したんやろ？」

皐月「いや、練習言うほどでは……」

筒井「なにやったら弾ける？」

皐月「……万博のテーマソングとか」

筒井「世界の国からこんにちは!! そんなん練習してたん!!」

皐月「弾きたい曲一通り練習しきってしもて……」

筒井「え!!」

皐月「レコードショップで聞かせてもらて好きやった曲、思い出しながら弾いたり……テレビでよう聞くの弾いてみたり……あともう何弾いていいか分からんようなって」

筒井「それで万博のテーマ？」

皐月「はい」

筒井「(笑う)」

皐月「ちよつと! また笑う!」

筒井「ごめん! ちゃうねん! 皐月ちゃんめっちゃすごいな!」

皐月「え？」

筒井「楽譜も無いのにようそんな弾けたな!」

皐月「いや、間違ごうてるかもしれんけど」

筒井「いや、ええよ。すごいやん! ほんならなんでもええから弾いて! 合わせて吹くわ!」

皐月、筒井の横にギターを抱えて座る。

筒井、ブルースハープを構えて待つ。
間。

皐月「(歌)……上を向いて歩こう」

皐月、ギターをゆつくりと奏でます。

皐月「（歌）涙がこぼれないように　思い出す春の日　一人ぼっちの夜」

筒井、合わせて柔らかい音色を奏でる。

皐月と筒井、歌とギターとブルースハープで一曲演奏しきる。

筒井「めちやくちやええやん」

皐月「ブルースハープも、めちやくちやいいです」

筒井「まだまだやわ」

皐月「いつもそう言いますね」

筒井「そう？　いつもまだまだやねんな、僕は」

下手側、丸川家では志保と弘子が夕食の支度を始めている。

いつもより少し豪華な食事が並ぶ。

皐月、立ち上がる。

筒井「行くの？」

皐月「はい、ありがとうございます。3年間、このレコードショップに筒井さんがいてはったから、ほんまに楽しかったです」

筒井「僕もほんまに楽しかったわ」

皐月「じゃあ、ギターは、お預かりします」

筒井「うん、そうして」

皐月「またいつか、返しに来ます」

筒井「うん」

皐月「それまでレコードショップにいてくださいね」

筒井「それは分らないで」

皐月「え？」

筒井「もしかしたら明日、アイドルになってるかも」

皐月「アイドルって。歌手の方がまだ現実味あります」

筒井「皐月ちゃんもな」

皐月「私？」

筒井「歌手、現実味あるわ」

皐月「：：：ありがとうございます」

筒井「ほんまに、また来てな」

皐月「：：：うちね、」

筒井「ん？」

皐月「うち、あっちです。この道真っすぐ、二十分くら

い自転車乗ったら着きます」

筒井「：：：そう」

皐月「はい」

筒井「教えてくれてありがとう」

皐月「いえ」

筒井「また会おな」

皐月「：：：はい！」

皐月、ギターを下げ、堤防を駆け上がる。

筒井「あ！卒業証書！忘れてんで！」

皐月「預かっててください！」

筒井「え!!」

皐月「ギターの人質替わりに！」

筒井「人質って！」

皐月「次来た時、ギターと交換で！」

筒井「：：：分かった！人質は預かった！」

皐月、笑顔で手を振って下手へ駆ける。
筒井、皐月の後姿を見送り、見えなくなってもしばらく立ち尽くしている。
少しして筒井、ブルースハープで『オー・シャンゼリゼ』を奏でながらレコードショップに退場。
筒井が退場した後も『オー・シャンゼリゼ』は流れ続ける。

⑭ 丸川家（夜）

志保と弘子が食卓に食事が並べ終わる所に皐月が帰宅。

皐月、居間を少し覗いてから荷物を置きに家の奥へ退場。

雄一郎、康作、奥からバラバラと登場し席に着く。
続いて皐月も戻って来て席に着く。
全員で食事を摂り始め、和やかな雰囲気談笑している様子。

やがて食事が終わり、雄一郎と康作はそのまま退場。

志保、弘子、皐月は3人で片付け始める。

弘子、食器を持って退場。

皐月、ちゃぶ台を拭いている。

志保、残りの食器を持って退場しようとし、ふと

皐月の後姿を見る。

少しして皐月、志保に気付いて振り向く。

皐月「何？」

志保「……うん。3年間よう頑張ったな」

皐月「何よ急に……。……お母ちゃん、あの高校に通わせて

くれてありがとう」

志保「お母ちゃんが行きたかった学校やってん」

皐月「そうやったん」

志保「そう」

皐月「……お母ちゃん」

志保「ん？」

皐月「おおきに、ほんまに」

志保「……（頷く）」

志保、部屋の奥に退場。

皐月、ちゃぶ台を拭きながらBGMに合わせて『オ
ー・シャンゼリゼ』を口ずさむ。

徐々に暗転。

⑮ 丸川家・外（明け方）

夜の闇にうつすらと明るさが漂い始める。

背中にギターケースを抱え、大きな手提げ鞆を抱
えた皐月、丸川家裏手から登場。

周囲を警戒しつつ、手に持って出て来た靴を履く。
空を見上げ、深呼吸する皐月。

荷物を担ぎ直し、足を踏み出す。

志保の声「皐月」

皐月、驚いて振り向く。

志保、丸川家裏手から草履姿で出て来る。

皐月「お母ちゃん」

志保、黙って皐月に分厚い封筒を握らせる。

皐月、中身を見る。

皐月「……これ」

志保「持って行き」

皐月「……何で？」

志保「これはお母ちゃんやお父ちゃんのお金ちゃうよ。

あんたの嫁入り資金や。せやさかいあんたのお金。賢

く使いなさい」

皐月「……こんな……なんで……」

志保、皐月を抱きしめる。

皐月、応えて抱き返す。

志保「生半可な気持ちちやうやろな」

皐月「……うん」

志保「せやけどどうしても困ったら、お母ちゃん宛に手

紙書き」

皐月「うん」

志保「本名使ったらあかんえ。消印も気つけて」

皐月「うん」

志保「……まずどこ目指すか決めてんのか」

皐月「渋谷」

志保「東京の？　なんで？」

皐月「一昨年渋谷に、ライブハウスというのが出来たらし

い」

志保「ライブハウス？」

皐月「前お母ちゃんと河原町のジャズ喫茶行った事ある

やろ」

志保「うん」

皐月「ああいうのの進化系らしいねん。それを見てみた

い」

志保「見て、どないすんの？」

皐月「まだ分からへんけど、出来る事なら働かせてもらう。無理やったら別のところで働いて、いつかそこで演奏して歌いたい」

志保「演奏ってあんた……」

皐月「これから音楽の形が変わっていくんやと思うねん。もつと身近なもんになる。それを近くで見届けたいし、私もそこに関わりたい」

志保「……」

皐月「明確な計画もないのにアホや思うかもしれんし、私も何の見通しも立ってへんのに、そんな状態で行ったってどうにも出来ひん思ってたけど、たぶん皆そうなんやと思うねん。ほんまは、見通しなんか立ってる人、誰もおらのちゃうかな。だって、5分先の事でも皆分からんと生きてる。それにすら気付かんと生きてるから、将来を見通してる気になってるだけで、それって、一番想像しやすい将来を想像してるだけなんちゃうやろか。それやったら、どうあがいたって想像の範疇を超えられへんって事やん。私の想像力なんかめちやくちや乏しい。せやから、自分の想像の範囲内だけで生きてたら絶対出来ひん事がいっぱいあんねん」

志保「……よう分かった」

だんだん明るさを増して来る方向の空に目をやる
志保。

皐月「お母ちゃん、私がお母ちゃんが昔諦めた事全部やって来るさかい。ほんで、ここの皆に見せたる。誰でも行こうと思たらどこでも行ける、やろうと思たら何でもできるってところ」

志保「（頷く）」

皐月「お母ちゃん、今までほんまおおきに。私、家族皆の事大好きやで」

志保「分かった。お母ちゃんも大好きや」

皐月「（頷く）」

志保「早よ行き。日昇ってしまおう」

皐月「うん……。行ってきました」

皐月、志保に背を向ける。

志保「もう二度と戻って来たらあかんえ」

皐月、少しの間の後振り向き、笑顔を見せ、堤防を駆け上がる。

志保、皐月の後姿を見送る。

皐月、上手へ歩いて行き、徐々に駆け足になり、立ち止まらずそのまま退場。

志保、涙を拭って郵便受けから新聞を取り出し、何事もなかったかのように丸川家へ退場。

⑩ 堤防風景【一九七二年 五月】

レコードショップから出て来る筒井。

空を仰ぎ、伸びをして堤防斜面に寝転がり、ブルースハープで『オー・シャンゼリゼ』を吹き始める。

弘子、丸川家から出て来て家の前の掃き掃除を始める。

雄一郎、康作、作業着姿で丸川家から出て来て下手袖へ歩いて行く。

少ししてマタニティ姿の景子、堤防の下手から買
い物袋を提げて登場し、上手へ歩いて行く。
レコードショップ近くまで来て筒井のブルースハ
ープに気付き、足を止める景子。
筒井、景子に気付いて堤防を駆け上がり、嬉しそ
うに会話し始める。
筒井がブルースハープをやめても音楽は続いてい
る。

弘子、掃除を終え、丸川家へ入る。
すれ違いで志保、買い物袋を持って丸川家から登
場。堤防の下を上手へ歩く。

景子、志保に気付いて堤防上から笑顔で声をかけ
る。

志保、景子に気付いて応える。

斜面を下りようとする景子を支えつつ一緒に下り
て来る筒井。

志保、景子、筒井、三人で談笑する。

BGMが次第に大きくなっていき、照明は徐々に
暗転して行く。

完全に暗転し、BGMが止まる。

上部から吊るされた無数のLED電球が徐々に光
り始める。

皐月の声「あ！」

景子の声「え!!」

皐月の声「今、流れへんかった!!」

景子の声「うそ!! 皐月がいらんこと言うから見逃した

やん！」

皐月の声「あ！　また流れた！」

景子の声「え!!　どこ!!」

皐月の声「あっち！」

景子の声「私も見たい見たい！」

景子の声「あ！」

皐月の声「見れた!!」

景子の声「うん！」

皐月の声「あ！」

景子の声「あ！」

皐月の声「すごい、いっぱい流れ出した！」

景子の声「すごいな！　綺麗！」

皐月の声「せや！　願い事せなあかん！」

景子の声「え、そんなんするん？」

皐月の声「チャンスやん！」

景子の声「チャンスか？」

皐月の声「ほら、3回やで」

景子の声「3回は無理やろ」

皐月の声「ええから一応しとくねん、こういう時は！」

景子の声「もつとゆったり楽しみたいんやけど」

皐月の声「景子の赤ちゃんが無事生まれて私に懐きます

ように、景子の赤ちゃんが無事生まれて私に懐き

ますように、景子の赤ちゃんが無事生まれて私に

懐きますように！　3回言えたかな!!」

景子の声「絶対言えてへんやろ」

皐月「えー！　景子もはよ言いや！　終わってまうで！」

景子「よし！　皐月が東京で売れっ子の歌手になります

ように、皐月が東京で売れっ子の歌手になります

ように、皐月が東京で売れっ子の歌手になります

ように！　あぶなー！　3回言えへんとかやった

わ！」

皐月の声「絶対言えてへんわ！」
景子の声「皐月、私ら、がんばろな」
皐月の声「景子、がんばろな」

『オー・シャンゼリゼ』が流れ始め、星の光が強まる。

完

引用

① 楽曲「この広い野原いっぱい」

作詞…小薮江圭子

作曲…森山良子

引用箇所：P.4～P.5

② 楽曲「オー・シャンゼリゼ」

作詞…ピエール・ドラノエ

作曲…マイク・ウイルシュ

引用箇所：P.31～P.34／P.79～80／P.83～P.84／P.86

③ 楽曲「上を向いて歩こう」

作詞…永六輔

作曲…中村八大

引用箇所：P.60～P.61／P.77

④ 楽曲「世界の国からこんにちは」

作詞…島田陽子

作曲…中村八大

引用箇所：P.76